Jung の心理学的タイプ測定尺度 (JPTS) の作成¹

佐藤淳一² 甲南大学

Construction of Jung Psychological Types Scale

Junichi Sato (Konan University)

The purpose of this study was to construct Jung's Psychological Types Scale (JPTS), and to examine its reliability and validity. First, 87 pairs of items were written, and their content validity examined by two Jungian analysts, who judged 74 pairs of them to be appropriate. In Study 1 542 undergraduates, 245 men and 297 women, responded to the interim scale. Exploratory factor analysis found three factors: extraversion-introversion (E-I), thinking-feeling (T-F), and sensation-intuition (S-N). Results of additional factor analyses indicated that the three factors were almost orthogonal. Then, nine item pairs each for the subscales were selected for the JPTS. The scale had high alpha and test-retest reliability coefficients. In Study 2, concurrent validity of the scale was examined in terms of Myers-Briggs Type Indicator (MBTI) Form M. The correlations showed meaningful patterns for concurrent validity. In addition, the scale was evaluated in terms of NEO Five Factor Inventory (NEO-FFI), a five-factor model (FFM) scale. The result showed that the three factors of E-I, T-F, and S-N corresponded to Extraversion (positive), Agreeableness (negative), and Openness (negative) of NEO-FFI, respectively.

Key words: Jung, Psychological Types, scale construction, reliability, validity.

The Japanese Journal of Psychology

2005, Vol. 76, No. 3, pp. 203-210

Jung の“心理学的タイプ”(Psychologische Typen: 以下, タイプ論とする)は 1921 年に出版され, その後現在まで, 向性の概念を中心に, 心理学一般に大きな影響を与えてきた。Jung (1921)によれば, ある個人のタイプは, 一般態度 (general attitude) と心的機能 (psychological function) の二つの側面からなる。前者は“外向-内向”(Extraversion-Introversion: 以下 E-I とする)から, 後者は“思考-感情”(Thinking-Feeling: 以下 T-F とする)および“感覚-直観”(Sensation-Intuition: 以下 S-N とする)から構成され, それぞれが直交する構造を持つとされる。

Correspondence concerning this article should be sent to: Junichi Sato, Department of Human Science, Graduate School of Humanities, Konan University, 1-9-8, Okamoto, Higashinada-ku, Kobe 658-8501, Japan (e-mail: jun-sato@mx.biwa.ne.jp)

¹ 本研究は, 平成 13 年度京都市立大学大学院臨床心理学研究科提出の修士論文に再調査ならびに再分析を行ったものである。なお, 研究の一部は日本心理学会第 68 回大会にて発表した。

² 本論文作成にあたり, ご指導いただきました甲南大学森茂起先生に深謝いたします。また, 内容妥当性の検討にご協力いただきました甲南大学横山博先生と神戸女学院大学山口素子先生, 研究内容に貴重なご助言をいただきました甲南大学木村晴子先生, 甲南女子大学の山田尚子先生と万代・平田両氏, 匿名の審査者の先生方に心よりお礼申し上げます。

Jung のタイプ論は, Jung 自らの臨床経験を通じて考え出された類型論の一種であり, 心理療法における羅針盤 (compass) の役割を果たしていた。また心理学, 哲学, 思想, 文学, 宗教といった広範な領域に心理学的タイプの実例を求め論じることで, その存在を基礎づけている。このタイプ論が生み出された背景には, Freud と袂を分かった後の混乱のなかで, Freud や Adler の理論とは異なる自らの立場を打ち立てようとする目的も含まれていた。

これまで国外では, Jung のタイプ論に関する実証研究が盛んに行われてきた。心理学的タイプの測定については, 主に 3 種類の尺度が開発され利用されている。以下に, それぞれの尺度を発表順に紹介し, 信頼性と妥当性に焦点を当て概観していく。

1. Gray-Wheelwright/Jungian Type Survey: GW/JTS (Wheelwright, Wheelwright, & Gray, 1964)。米国の Jung 派分析家 Wheelwright, J. B. らによって, 初版が 1944 年に作成され, 現在 1964 年に改訂された第 16 版が用いられている。尺度形式は二者択一法に設定され, E-I が 34 項目対, T-F が 21 項目対, S-N が 26 項目対, 計 81 項目対から構成されている。

Mattoon & Davis (1995) は, GW/JTS に関する展望を行う中で, T-F における信頼性および妥当性の問

題を指摘している。特に T-F の信頼性については、 α 係数が .20-.35, 再検査信頼性係数が .45 と低い値が報告されている。

2. Myers-Briggs Type Indicator: MBTI (Myers & Briggs, 1998)。Briggs と Myers によって 1942 年から開発が行われ、現在米国では 1998 年に改訂された Form M が用いられている。尺度形式は GW/JTS と同様の二者択一法であり、E-I が 21 項目対、T-F が 24 項目対、S-N が 26 項目対、“判断-知覚” (Judgment-Perception: 以下 J-P とする) が 22 項目対、計 93 項目対から構成されている。なお J-P は、MBTI で新たに設けられた下位尺度である。

これまで米国を中心に MBTI を用いた研究は数多く行われており、MBTI に関する展望もいくつかなされている (Carlson, 1985; Carlyn, 1977; Murray, 1990; Myers, McCaulley, Quenk, & Hammer, 1998)。それらを総括すると、信頼性に関しては十分な結果が得られている。Form M の結果によると、内的整合性は各下位尺度において $\alpha = .88-.95$, 1 カ月をあけての再検査法は各下位尺度において $r = .83-.95$ の高い値が報告されている (Myers et al., 1998)。妥当性に関しては、多くの結果が報告されているが、因子妥当性については評価が別れている。まず、探索的因子分析による検討では、一方で MBTI の 4 因子構造が確認されたと報告されており (Thompson & Borrello, 1986; Tischler, 1994; Tzeng, Outcalt, Boyer, Ware, & Landis, 1984), 他方で 4 因子構造が確認されていないと報告されている (Comrey, 1983; Sippes, Alexander, & Friedt, 1985)。検証的因子分析による検討では、いずれも MBTI の 4 因子モデルが支持されているものの、一方で十分な適合度が得られたと報告されており (Myers et al., 1998), 他方で十分な適合度が得られていないと報告されている (Harvey, Murray, & Stamoulis, 1995; Jackson, Parker, & Dipboye, 1996)。併存的妥当性については、MBTI の E-I は GW/JTS の E-I ならびに 16PF (16 Personality Factors Questionnaire) および MIPS (Millon Index of Personality Styles) の E と、MBTI の T-F は MIPS の T と、MBTI の S-N は GW/JTS の S-N および MIPS の S と、それぞれ中程度以上の正の相関が報告されている (Myers et al., 1998)。構成概念妥当性については、性格特性 5 因子論 (Five Factor Model: 以下 FFM とする) の観点から、MBTI の E-I は NEO-PI (NEO Personality Inventory) の外向性 (Extraversion: E) と中程度から強い正の相関、MBTI の T-F は NEO-PI の調和性 (Agreeableness: A) と中程度の負の相関、MBTI の S-N は NEO-PI の開放性 (Openness: O) と中程度から強い負の相関、MBTI の J-P は NEO-PI の誠実性 (Conscientiousness: C) と中程度の正の相関が得られている (McCrae & Costa, 1989)。

ただし MBTI には、こうした検討以外の面でいくつかの疑問点も挙げられている。回答形式やスコアリングに関する議論もあるが (Barbuto, 1997; Cowan, 1989; Loomis & Singer, 1980), より重要と思われるのは、MBTI の定義や項目内容が Jung の概念の限定された側面しか反映していないと指摘されている点であり (Coan, 1978; Comrey, 1983; Mendelsohn, 1965; Stricker & Ross, 1964), J-P の定義など Myers & Briggs の理論には Jung の理論とは異なる点があるという主張もなされている (Garden, 1991)。

3. Singer-Loomis Type Deployment Inventory: SL-TDI (Singer, Loomis, Kirthart, & Kirthart, 1996)。米国の Jung 派分析家 Singer と Loomis が 1980 年に発表した Singer-Loomis Inventory of Personality: SLIP を、後に Kirthart, L. と Kirthart, E. が改訂したもので、現在は第 4.1 版が用いられている。SL-TDI は 20 の場面ごとに 8 下位尺度の項目 (外向思考, 内向思考, 外向感情, 内向感情, 外向感覚, 内向感覚, 外向直観, 内向直観), 計 160 項目から構成されている。尺度形式は、GW/JTS や MBTI と異なり、対極性の概念に基づかない単極型の 5 段階評定に設定されている。

SL-TDI の信頼性に関しては、十分な内的整合性および安定性の結果が報告されている (Arnau, Rosen, & Thompson, 2000; Kirthart & Kirthart, 1998)。一方、妥当性に関しては十分示されているとはいえず、因子妥当性については SLIP, SL-TDI とともに各下位尺度を反映する因子構造はまだ確認されていない (Loomis, 1982; Singer & Loomis, 1996)。併存的妥当性については、SLIP の F および J のみ MBTI の同名下位尺度と弱い正の相関が得られている (MacDonald & Holland, 1993)。構成概念妥当性については、FFM の観点から、SL-TDI の E, I および N, T は、順に NEO-FFI (NEO Five Factor Inventory) の E, 神経症傾向 (Neuroticism: N), C との間で弱い正の偏相関が得られている (Arnau, Thompson, & Rosen, 1999)。

こうした国外の研究に対し、これまで国内の心理学領域では、Jung のタイプ論に関する研究は、全体としてあまり行われてこなかった。河合 (1982) は 1970 年代までの国内外のタイプ論に関する文献を展望しているが、現在も国内の研究動向は大きく変動していないと思われる。心理学的タイプの測定については、これまで 8 カテゴリーによる Q 分類法が作成されている (小川・河合・原野・伊藤・小川, 1969; 小川・市村・佐野, 1970)。また近年では、MBTI Form G の日本語版が発表されている (ブリッグス・マイヤーズ・園田・瀧本, 2000)³。一方、MBTI の Form

³ 学術雑誌には、Form G の信頼性に関して報告されている (中澤, 1997; 田端, 1998; Tsuzuki & Matsui, 1997)。

M や、GW/JTS、SL-TDI の日本語版は発表されていない⁴。

以上、3 種類の尺度の信頼性および妥当性を概観してきたが、その中から主な問題と思われる点について要約する。GW/JTS は、T-F における信頼性が低い。MBTI は、定義や項目内容が Jung の概念を十分に反映しているかどうか内容妥当性に再検討の余地がある。SL-TDI は、対極性の概念に基づいておらず⁵、因子妥当性が十分に確認されていない。

そこで本研究では、Jung の概念をできるかぎり反映した新たな心理学的タイプの測定尺度の作成を試みる。これまで佐藤（2003b, 2003c）は予備的検討として Jung's Typology Questionnaire（以下 JTQ とする）を作成した。JTQ の尺度形式は、タイプ論の対極性の概念に基づき、双極型の多段階評定を採用している⁶。調査の結果、JTQ は E-I、T-F、S-N の計 19 項目対から構成されたが、S-N の内的整合性が十分でなく、妥当性の検討方法も見直しが必要とされた。そこで本研究では、あわせて項目内容も見直し、さらに専門家による内容妥当性の確認を行うことによって、より精度の高い尺度 Jung's Psychological Types Scale（以下 JPTS とする）を作成する。

研究 1

目 的

項目対を準備した後、専門家による内容妥当性の検討を行う。因子分析を用いて JPTS の尺度構成を行う。内的整合性および再検査法による信頼性を検討する。

方 法

項目対の準備 JTQ の 19 項目対に、Jung のタイプ論に関する文献（Jung, 1921, 1968；河合, 1967；小川他, 1969, 1970）を参考に作成した項目対を追加し、計 87 項目対を準備した。項目作成の際には、著書“タイプ論”（Jung, 1921）の第 11 章“定義”に依

⁴ 佐藤（2003a）は、GW/JTS、MBTI Form M、SL-TDI の研究用日本語版を作成し、内的整合性による信頼性と探索的因子分析による妥当性の比較検討を行った。その結果、内的整合性については MBTI と SL-TDI が確認され、因子妥当性については中でも MBTI が確認された。

⁵ 対極性の両面を測定しようとする形式は、個性化の過程を理解する上で有益であろう。とはいえ、対極性の概念はタイプ論の中核にあり、それを全く排した形式では、Jung 元来の考えから離れてしまうとも考えられる。

⁶ 具体的には、ある項目対（a と b）に対し、“a にまったく当てはまる”、“a にかなり当てはまる”、“a にどちらかといえば当てはまる”、“a、b どちらともいえない”、“b にどちらかといえば当てはまる”、“b にかなり当てはまる”、“b にまったく当てはまる”の 7 段階評定を行う。

Table 1

JPTS のバリマックス回転、3 因子抽出による因子分析結果

番号	種類	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
4	E-I	.700	.011	-.157	.514
10	E-I	.658	-.004	-.159	.458
28	E-I	.644	-.095	.080	.430
7	E-I	.618	-.055	-.028	.385
22	E-I	.562	-.242	.176	.406
49	E-I	.498	-.115	.191	.298
37	E-I	.484	-.150	.084	.264
61	E-I	.442	.135	-.197	.253
19	E-I	.433	.184	-.169	.250
17	T-F	-.088	.608	.100	.388
65	T-F	-.066	.600	.085	.372
59	T-F	-.050	.588	.264	.417
8	T-F	-.080	.561	.234	.376
73	T-F	-.065	.549	.126	.321
47	T-F	.023	.548	-.118	.315
20	T-F	.013	.506	.036	.258
14	T-F	-.061	.484	.219	.286
41	T-F	.021	.427	.168	.211
45	S-N	.043	.116	.581	.353
12	S-N	-.042	.173	.558	.343
42	S-N	.019	.096	.507	.266
36	S-N	-.120	.052	.490	.257
57	S-N	-.036	.128	.476	.245
33	S-N	.050	.083	.471	.231
15	S-N	-.026	.140	.457	.229
27	S-N	-.023	.050	.445	.201
6	S-N	.000	.020	.434	.189
寄与		2.954	2.925	2.637	8.517
寄与率 (%)		10.94	10.84	9.77	31.54

拠しつつ、できるだけ幅広い側面を反映するように考慮した。なお、臨床心理学の教員 1 名との協議によって内容や表現の質の向上を図っている。

内容妥当性の検討 各項目対の内容妥当性の評定を Jung 派分析家 2 名に依頼した。評定方法は、(a) 項目対の内容および対極性がどちらも妥当といえる、(b) 項目対の内容あるいは対極性のどちらか一方が妥当といえる、(c) 項目対の内容あるいは対極性のどちらも妥当とはいえない、のいずれかを選択する。Jung 派分析家の評定が両者とも (a)、あるいは一方が (a) で他方が (b) と評定した項目対を内容妥当性の通過基準とした。その結果、E-I が 21 項目対、T-F が 27 項目対、S-N が 26 項目対、計 74 項目対の内容妥当性が確認された。

調査対象と時期 神戸市内の大学生 542 名（男性 245 名、女性 297 名、平均年齢 20.1 歳、文系 427 名、

理系 115 名)。授業時間中を利用して集団実施された。調査時期は 2003 年 10 月から 11 月。なお、その内の 64 名に対し、約 1 カ月の間隔をあけて再検査法を行った。

質問紙 JPTS, 74 項目対。得点化では、E-I では E から I, T-F では T から F, S-N では S から N の方向に、順に 7 点から 1 点を与えた。

結果と考察

尺度構成 まず、反応の偏りが大きい項目を削除した。次に、主因子法による因子分析を行い、因子数を 3 に指定してバリマックス回転を行った。そして、当該因子に絶対値 .40 以上の因子負荷量を持ち、単純構造を示す項目対を基準に選定を行った。最終的に各因子に 9 項目対ずつ計 27 項目対を採用し、JPTS の尺度構成を行った (Table 1 および付録)。因子 1 は E-I, 因子 2 は T-F, 因子 3 は S-N の項目対からそれぞれ構成されている。

次に JPTS の因子構造を検討するため、Amos 5 を用いて検証的因子分析を行った。3 因子無相関モデルの場合の適合度指標は、Goodness of Fit Index (GFI) = .836, Adjusted GFI (AGFI) = .808, Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA) = .074 であった。GFI, AGFI, および RMSEA の値はいずれも許容範囲内にある。したがって、タイプ論の概念を反映する JPTS の 3 因子独立構造はおおむね確認されたといえる。

記述統計量 各下位尺度における平均値、標準偏差および性差の検討を Table 2 に示す。性差の検討では、T-F において有意差が見られ、男性は女性に比べて思考が有意に高い、あるいは女性は男性に比べて感情が有意に高い傾向が見られた。これは、GW/JTS (Mattoon & Davis, 1995) や MBTI Form M (Myers et al., 1998) と同様の結果である。

信頼性 信頼性の結果を Table 3 に示す。各下位尺度における α 係数は .76—.80 の値を示し、十分な内的整合性が得られた。また、約 1 カ月の間隔をあけた再検査法の結果では、各下位尺度において $r = .67$ —.78 とほぼ満足のいく安定性が得られた。したがって、内的整合性および安定性による JPTS の信頼性が確認されている。

研究 2

目的

JPTS の併存的妥当性を検討する。また FFM の観点から JPTS の評価を行う。

方法

質問紙 1. JPTS。

Table 2
JPTS の下位尺度得点の男女別平均値、標準偏差、および性差による t 検定結果

下位尺度	男性 ^{a)}		女性 ^{b)}		t 値
	M	SD	M	SD	
E-I	31.73	8.49	32.38	9.56	-0.83
T-F	30.42	8.34	26.81	7.65	5.24**
S-N	35.56	8.01	36.31	7.39	-1.12

** $p < .01$.

^{a)} $N = 245$.

^{b)} $N = 297$.

Table 3
JPTS の下位尺度における信頼性

下位尺度	α 係数 ^{a)}	再検査信頼性係数 ^{b)}
E-I	.80	.73
T-F	.80	.78
S-N	.76	.67

^{a)} $N = 542$.

^{b)} $N = 64$.

2. MBTI Form M (Myers & Briggs, 1998)。MBTI については、これまで国外では数多くの研究の知見が蓄積されているため、JPTS の併存的妥当性を検討する尺度として用いることとする。なお MBTI Form M については、次の作業を行った。まず、著作権を有する Consulting Psychological Press に使用許可の手続きを経て入手した。次に、筆者が文化差を考慮して邦訳した後、英語を母語とする日本在住の英語教員が修正を施し、これを MBTI Form M 研究用日本語版とした (Permission 14 398)。得点化は、回答した側に 1 点を与えた。

3. FFM の尺度 NEO-PI-R (Revised NEO Personality Inventory) の短縮版である、日本版 NEO-FFI (コスタ・マクレー・下仲・中里・榎藤・高山, 1999)。NEO-FFI は、神経症傾向(N), 外向性(E), 開放性(O), 調和性(A), 誠実性(C)の 5 下位尺度に各 12 項目、計 60 項目から構成されている。先にも述べたように MBTI と NEO-PI には関連が見られており、また FFM の観点から米国の代表的パーソナリティテストの評価分類を行った Pervin & John (1999) は、MBTI の E-I, T-F, S-N, J-P を、順に FFM の E, 負の A, 負の O, C と対応づけている。そこで研究 2 では、JPTS の FFM との対応を NEO-FFI を用いて検討する。これは FFM から見た JPTS の評価であるが、他方で JPTS の構成概念妥当性として位置づけることもできる。NEO-FFI は 5 件法であり、得点化は順に 5 点から 1 点を与えた。

調査対象と時期 神戸市内の大学生 336 名 (男性

Table 4
JPTS, MBTI Form M および NEO-FFI 間の相関係数

	JPTS			MBTI Form M			
	E-I	T-F	S-N	E-I	T-F	S-N	J-P
JPTS ^{a)}							
E-I	—						
T-F	-.07	—					
S-N	-.04	.26**	—				
MBTI Form M ^{b)}							
E-I	.80**	-.30**	-.20**	—			
T-F	-.24**	.67**	.25**	-.35**	—		
S-N	-.12	.16*	.62**	-.16*	.27**	—	
J-P	-.08	.17*	.30**	-.08	.27**	.46**	—
NEO-FFI ^{c)}							
N	-.45**	-.04	.14	-.38**	.06	.24*	.23*
E	.70**	-.30**	-.27**	.69**	-.50**	-.26*	-.19
O	-.05	.03	-.32**	-.11	-.09	-.33**	-.24*
A	.27**	-.40**	-.11*	.35**	-.52**	-.20	-.10
C	.25**	.16*	.00	.12	.07	-.04	.38**

* $p < .05$, ** $p < .01$.

^{a)} $N = 542$.

^{b)} $N = 245$.

^{c)} $N = 182$, NEO-FFI と MBTI Form M 間は $N = 92$.

136 名, 女性 200 名, 平均年齢 20.1 歳)。授業時間を利用して集団実施された。なお, 回答者の負担を考慮し, 質問紙の組み合わせを 3 種類に分けて実施した。すべての組み合わせが 92 名, JPTS と MBTI Form M の組み合わせが 153 名, JPTS と NEO-FFI の組み合わせが 182 名である。調査時期は 2003 年 11 月から 12 月。

結果と考察

ピアソンの相関係数による検討 JPTS, MBTI および NEO-FFI における各下位尺度間について, ピアソンの相関係数を算出した (Table 4)。

まず, JPTS と MBTI の相関の結果について述べる。JPTS の各下位尺度は MBTI の同名下位尺度と中程度以上の正の相関を示し, その他の下位尺度とは無相関から弱い相関を示した。

次に, JPTS と NEO-FFI の相関の結果について述べる。JPTS の E-I は, NEO-FFI の E と強い正の相関を示したが, NEO-FFI の N ととも中程度の負の相関を示した。JPTS の T-F は, NEO-FFI の A と中程度の負の相関を示した。JPTS の S-N は, NEO-FFI の O と弱い負の相関を示したが, E ととも弱い相関を示した。JPTS の E-I と NEO-FFI の N との関連がやや強く, JPTS の S-N と NEO-FFI の O との関連がやや弱いことを除けば, ほぼ予測通りの結果が得られている。なお MBTI の S-N と NEO-FFI の O との関連も,

予測と比べるとやや弱い結果である。

ジョイント因子分析による検討 すべての組み合わせ 92 名のデータを用いて, JPTS, MBTI Form M および NEO-FFI の計 12 下位尺度について, 主因子法による因子分析を行った。FFM を考慮して因子数を 5 に指定し, バリマックス回転を施した (Table 5)。その結果, 因子 1 には JPTS の E-I, MBTI の E-I, NEO-FFI の E が高い因子負荷量を示した。因子 2 には JPTS の T-F, MBTI の T-F, NEO-FFI の負の A が高い因子負荷量を示した。因子 3 には MBTI の S-N, JPTS の S-N および NEO-FFI の負の O が高い因子負荷量を示した。因子 4 には MBTI の J-P, NEO-FFI の C が高い因子負荷量を示した。因子 5 には NEO-FFI の N が高い因子負荷量を示した。NEO-FFI の E を除けば, すべての下位尺度は各因子に単純構造を示している⁷。先の JPTS と NEO-FFI の相関では予測以外の尺度間にも関連が見られていたが, ジョイント因子分析による検討では予測以外の尺度間は弁別された。特に JPTS の E-I と NEO-FFI の N が弁別されたことは, タイプ論の概念と一致し, 構成概念の妥当性も示している。

研究 2 の検討を要約する。第 1 に, JPTS の各下位尺度は MBTI の同名下位尺度と収束的にまとまり, その他の尺度とは弁別された。したがって, JPTS の

⁷ NEO-FFI 単独の因子構造を検討すると, 各項目は当該因子に単純構造を示した。

Table 5
JPTS, MBTI Form M および NEO-FFI の下位尺度得点の
バリマックス回転, 5 因子抽出による因子分析結果

下位尺度と尺度	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	共通性
E-I: JPTS	.943	-.057	-.003	.063	-.231	.949
E-I: MBTI	.824	-.219	-.076	.035	-.130	.750
E: NEO-FFI	.720	-.420	-.134	.045	-.080	.721
T-F: JPTS	-.050	.761	.124	.097	-.142	.627
T-F: MBTI	-.231	.715	.206	.199	-.006	.646
A: NEO-FFI	.219	-. .641	-.098	.055	-.160	.497
S-N: MBTI	-.182	.077	.824	.066	.124	.737
S-N: JPTS	-.175	.243	.710	-.093	.034	.603
O: NEO-FFI	-.103	-.067	-. .404	-.118	.003	.192
J-P: MBTI	-.085	.142	.316	.793	.214	.802
C: NEO-FFI	.127	.036	-.059	.555	-.166	.356
N: NEO-FFI	-.307	-.012	.109	-.044	.841	.816

併存的妥当性は一定の基準を持って確認されたといえる。第 2 に, JPTS の E-I, T-F, S-N は, 順に NEO-FFI の E, 負の A, 負の O にそれぞれ対応していた。したがって, JPTS は FFM の 3 側面に対応しているといえる。

全体的考察

本研究では, Jung の心理学的タイプを測定する尺度 JPTS の作成を試みた。JPTS の特徴は, (a)タイプ論の対極性の概念に基づき, 尺度は双極型の多段階評定であること, (b)Jung 派分析家による内容妥当性の検討が行われたこと, (c)タイプ論の概念を反映する 3 因子構造がおおむね確認されたこと, (d)内的整合性および安定性による信頼性が確認されたこと, (e)MBTI Form M による併存的妥当性の確認が行われたこと, (f)FFM の 3 側面に対応していること, の 6 点である。

本研究の限界として, 調査対象を大学生のみとしている点, ジョイント因子分析では対象者数が不十分な点などが挙げられる。また結果の分析には, 尺度得点の類型化による検討も課題として残されている。今後は, こうした課題とともに, FFM の概念をタイプ論の観点から吟味することも意義があると思われる。なお, JPTS を用いる際には, あくまで回答者の意識的態度に焦点を当てていることに留意する必要がある。

引用文献

- Arnau, R. C., Rosen, D. H., & Thompson, B. (2000). Reliability and validity of scores from the Singer-Loomis Type Deployment Inventory. *Journal of Analytical Psychology*, **45**, 409-426.
- Arnau, R. C., Thompson, B., & Rosen, D. H. (1999). Alternative measures of Jungian personality constructs. *Measurement & Evaluation in Counseling & Development*, **32**, 90-104.
- Barbuto, J. E. (1997). A critique of the Myers-Briggs Type Indicator and its operationalization of Carl Jung's psychological types. *Psychological Reports*, **80**, 611-625.
- ブリッグス C. C.・マイヤーズ I. B.・園田由紀・瀧本孝雄 (2000). 日本版 MBTI Form G 金子書房 (Briggs, C. G., Myers, I. B., Sonoda, Y., Takimoto, T.)
- Carlson, J. G. (1985). Recent assessment of the Myers-Briggs Type Indicator. *Journal of Personality Assessment*, **49**, 356-365.
- Carlyn, M. (1977). An assessment of the Myers-Briggs Type Indicator. *Journal of Personality Assessment*, **41**, 461-473.
- Coan, R. W. (1978). Review of the Myers-Briggs type indicator. In O. K. Buros (Ed.), *The eighth mental measurements yearbook*. Highland Park, NJ: Gryphon Press. pp. 970-975.
- Comrey, A. L. (1983). An evaluation of the Myers-Briggs Type Indicator. *Academic Psychology Bulletin*, **5**, 115-129.
- コスタ P. T.・マクレイ R. R.・下仲順子・中里克治・権藤恭之・高山 緑 (1999). 日本版 NEO-PI-R, NEO-FFI 使用マニュアル 東京心理 (Costa, P. T., McCrae, R. R., Shimonaka, Y., Nakazato, K., Gondo, Y., & Takayama, M.)
- Cowan, D. A. (1989). An alternative to the dichotomous interpretation of Jung's psychological functions: Developing more sensitive measurement technology. *Journal of Personality Assessment*, **55**, 459-471.
- Harvey, R. J., Murray, W. D., & Stamoulis, D. T. (1995). Unresolved issues in the dimensionality of

- the Myers-Briggs Type Indicator. *Educational and Psychological Measurement*, **55**, 535-544.
- Garden, A. M. (1991). Unresolved issues with the Myers-Briggs Type Indicator. *Journal of Psychological Type*, **22**, 3-14.
- Jackson, S. L., Parker, C. P., & Dipboye, R. L. (1996). A comparison of competing models underlying responses to the Myers-Briggs Type Indicator. *Journal of Career Assessment*, **4**, 99-115.
- Jung, C. G. (1921). *Psychologische Typen*. Zürich: Rascher Verlag.
(ユング, C. G. 林 道義 (訳) (1987). タイプ論 みすず書房)
- Jung, C. G. (1968). *Analytical psychology: Its theory and practice*. London: Routledge & Kegan Paul Ltd.
(ユング, C. G. 小川捷之 (訳) (1976). 分析心理学 みすず書房)
- 河合隼雄 (1967). タイプ ユング心理学入門 培風館 pp. 37-63.
(Kawai, H.)
- 河合隼雄 (1982). ユングのタイプ論に関する研究——文献の展望—— 京都大学教育学部紀要, **28**, 1-15.
(Kawai, H.)
- Kirihart, L., & Kirihart, E. (1998). *Statistical performance of the Singer-Loomis Type Deployment Inventory: An interim report*. Gresham, OR: Moving Boundaries.
- Loomis, M. (1982). A new perspective for Jung's typology: The Singer-Loomis Inventory of Personality. *Journal of Analytical Psychology*, **27**, 59-69.
- Loomis, M., & Singer, J. (1980). Testing the bipolar assumption in Jung's typology. *Journal of Analytical Psychology*, **25**, 351-356.
- MacDonald, D. A., & Holland, C. J. (1993). Psychometric evaluation on the Singer-Loomis Inventory of Personality. *Journal of Analytical Psychology*, **38**, 303-320.
- Mattoon, M. A., & Davis, M. (1995). The Gray-Wheelwright Jungian Type Survey: Development and history. *Journal of Analytical Psychology*, **40**, 205-234.
- McCrae, R. R., & Costa, P. T. (1989). Reinterpreting the Myers-Briggs Type Indicator from the perspective of the five-factor model of personality. *Journal of Personality*, **57**, 17-40.
- Mendelsohn, G. A. (1965). A review of the Myers-Briggs type indicator. In O. K. Buros (Ed.), *The sixth mental measurements yearbook*. Highland Park, NJ: Gryphon Press. pp. 321-322.
- Murray, J. B. (1990). Review of research on the MBTI. *Perceptual and Motor Skills*, **70**, 1187-1202.
- Myers, I. B., & Briggs, K. C. (1998). *The Myers-Briggs Type Indicator Form M*. Palo Alto, CA: Consulting Psychologist Press.
- Myers, I. B., McCaulley, M. H., Quenk, N. L., & Hammer, A. L. (1998). *MBTI manual: A guide to the development and use of the Myers-Briggs Type Indicator*. 3rd ed. Palo Alto, CA: Consulting Psychologist Press.
- 中澤 清 (1997). MBTI 日本語版に関する基礎研究 人文論究, **47**(3), 44-58.
(Nakazawa, K.)
- 小川捷之・市村操一・佐野千代子 (1970). 学生活動家のタイプに関する一考察——成分分析による検討—— 心理学評論, **14**(1), 80-104.
(Ogawa, K., Ichimura, S., & Sano, C.)
- 小川捷之・河合隼雄・原野広太郎・伊藤恵子・小川洋子 (1969). 心理療法における治療者のタイプと治療技法 臨床心理学研究, **8**, 165-176.
(Ogawa, K., Kawai, H., Harano, K., Ito, K., & Ogawa, Y. (1969). The types of psychotherapist's personality and their schools of thoughts. *Japanese Journal of Clinical Psychology*, **8**, 165-176.)
- Pervin, L. A., & John, O. P. (Eds.) (1999). *Handbook of personality theory and research*. 2nd ed. New York: The Guilford Press.
- 佐藤淳一 (2003a). Jung のタイプスケールに関する基礎研究——GW/JTS, MBTI, SL-TDI における信頼性および妥当性の比較検討—— 心理臨床学研究, **21**, 410-415.
(Sato, J. (2003a). A study on Jung's psychological type scale. *Journal of Japanese Clinical Psychology*, **21**, 410-415.)
- 佐藤淳一 (2003b). Jung の心理学的タイプスケール作成の試み 日本心理臨床学会第 22 回大会発表論文集, 260.
(Sato, J.)
- 佐藤淳一 (2003c). Jung の心理学的タイプスケール作成の試み (II) 日本パーソナリティ心理学会第 12 回大会発表論文集, 92-93.
(Sato, J.)
- Singer, J., & Loomis, M. (1996). *Technical manual for the Singers-Loomis Type Deployment Inventory*. Gresham, Oregon: Moving Boundaries.
- Singer, J., Loomis, M., Kirihart, L., & Kirihart, E. (1996). *The Singer-Loomis Type Deployment Inventory*. version 4.1. Gresham, OR: Moving Boundaries.
- Sipps, G. J., Alexander, R. A., & Friedt, L. (1985). Item analysis of the Myers-Briggs Type Indicator. *Educational and Psychological Measurement*, **45**, 789-796.
- Stricker, L. J., & Ross, J. (1964). Some correlates of a Jungian personality inventory. *Psychological Reports*, **14**, 623-643.
- 田端純一郎 (1998). MBTI 日本語版に関する基礎研究 横浜商大論集, **31** (1・2), 160-175.
(Tabata, J.)
- Thompson, B., & Borrello, G. M. (1986). Construct validity of the Myers-Briggs Type Indicator. *Educational and Psychological Measurement*, **46**, 745-752.

- Tischler, L. (1994). The MBTI factor structure. *Journal of Psychological Type*, **31**, 24-31.
- Tsuzuki, Y., & Matsui, T. (1997). Test-retest reliabilities of a Japanese translation of the Myers-Briggs Type Indicator. *Psychological Reports*, **81**, 349-350.
- Tzeng, O. S. C., Outcalt, D., Boyer, S. L., Ware, R., & Landis, D. (1984). Item validity of the Myers-

- Briggs Type Indicator. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 255-256.
- Wheelwright, J. B., Wheelwright, J. H., & Gray, H. (1964). *Jungian Type Survey: The Gray-Wheelwright test*. 16th revision. CA: Society of Jungian Analysis of Northern California.

——2002. 8. 5 受稿, 2005. 3. 26 受理——

付 録

JPTS の項目対

番号	項目対内容
4	新しい環境にもすぐにとけこめるほうだ。
10	初対面の人と話をするのは得意なほうだ。
28	外側の世界を広げていくのは得意なほうだ。
7	社交的で、交友関係は広いほうだ。
22	楽しみを外側の世界に求めるほうだ。
49	やる気やエネルギーを外側の世界に注ぐほうだ。
37	大勢の人と一緒に遊ぶのが好きなほうだ。
61	自分のことを表現するのに躊躇しないほうだ。
19	自分の思っていることをみんなに伝えるのは得意なほうだ。
17	人の理屈や考え方に興味があるほうだ。
65	日々の生活に筋道立った道理や理屈が必要だと思うほうだ。
59	ものごとを論理的に捉えようとするほうだ。
8	ものごとを理屈で判断していくほうだ。
73	筋道を重んじるほうだ。
47	人と議論し合うのが好きなほうだ。
20	意見を議論し合うことは大事だと思うほうだ。
14	理性的な生活を心がけているほうだ。
41	対人場面では、相手の考えや意見を察するほうだ。
45	第六感や予感をそれほど重視しないほうだ。
12	事実に基づいて進もうとするほうだ。
42	さまざまな五感の感覚を楽しむほうだ。
36	未知なものに出会ったとき、五感の感覚を頼りにするほうだ。
57	事実やデータを大切にするとうまくいくことが多い。
33	実際ので現実的な仕事に興味があるほうだ。
15	すでに確立されたやり方を重視するほうだ。
27	音楽や絵を鑑賞しているとき、何かがひらめくことは少ない。
6	五感の感覚に敏感なほうだ。
	新しい環境になじむまでは時間がかかるほうだ。
	初対面の人と話をするのは苦手なほうだ。
	内側の世界を深めていくのは得意なほうだ。
	気のあった少数の友人と深くつきあうほうだ。
	楽しみを内側の世界に求めるほうだ。
	やる気やエネルギーを内側の世界に注ぐほうだ。
	少数、または一人で遊ぶのが好きなほうだ。
	自分のことを表現するのに躊躇するほうだ。
	自分の思っていることをみんなに伝えるのは苦手なほうだ。
	人の感情や気持ちに興味があるほうだ。
	日々の生活に気持ちのふれあいや情緒的な交流が必要だと思うほうだ。
	ものごとを情緒的に捉えようとするほうだ。
	ものごとを気持ちで判断していくほうだ。
	人情を重んじるほうだ。
	人と気分良くいるのが好きなほうだ。
	気持ちをわかち合うことは大事だと思うほうだ。
	気分のいい生活を心がけているほうだ。
	対人場面では、相手の気持ちや感情を察するほうだ。
	第六感や予感を重視するほうだ。
	未知のものに向かって進もうとするほうだ。
	さまざまな予感や第六感を楽しむほうだ。
	未知なものに出会ったとき、第六感やひらめきを頼りにするほうだ。
	予感やひらめきを大切にするとうまくいくことが多い。
	アイデアや発想勝負の仕事に興味があるほうだ。
	新しいアイデアを重視するほうだ。
	音楽や絵を鑑賞しているとき、何かがひらめくことは多い。
	第六感に敏感なほうだ。